

平成29年東北視察報告書・・・・・・資料1

1. 日程

視察年月日 平成29年8月2日(水) ～8月4日(金)

2. 視察先

- ・三沢市役所 青森県三沢市桜町 1-1-38
- ・久慈市役所 岩手県久慈市川崎町 1 番 1 号
- ・八戸市ブックセンター 青森県八戸市六日町 16 番地 2
- ・十和田市民図書館 青森県十和田市西十三番町 2-18

3. 視察内容

【三沢市】8月2日(水) (15:00～17:00)

I. 視察目的

「一次産品を活用した特産品の開発について」

II. 視察概要

◎三沢市の概要

三沢市は、青森県東部に位置し、東に太平洋を臨み、西は小川原湖に接している。面積は、約120km²で、海拔57mの東部へゆるい傾斜をもった平坦地である。人口は約4万人であり、現在は若干減少傾向ではあるが、昭和55年当時も現在と同程度の人口であり、自衛隊も含めた基地の存在は大きい。在日米軍三沢基地は、そこに所属の軍人・軍属とその家族で約1万人が住んでおり、基地所属部隊は米国各軍（主に空軍）および航空自衛隊である。また、産業別人口は、第1次産業が7%、第2次産業が21%、第3次産業が67%となっている。

気象は、冬場北国としては降雪量が少なく、北西から吹く季節風のため、晴天の多いことが特徴である。春から夏にかけて偏東風（ヤマセ）が吹き、この状態が長く続くと冷気と濃霧におおわれ、農作物に影響を与え凶作となることがある。また、梅雨明けは遅く、夏が短いのも特徴である。

なお、詩人・劇作家の寺山修司の故郷であり、寺山修司記念館がある。

◎視察研修テーマ「一次産品を活用した特産品の開発について」

特産品開発への支援の取り組みの経緯と概要について

三沢市の農産物のゴボウ・にんにく・ながいも、畜産品のブランドポーク、水産物の

スルメイカ・北寄貝・ヒラメ等は全国有数の品質で、市場からの評価も高かった。しかし安定生産・安定出荷体制確立のための基盤整備に人的・物的資本を集中投資してきたことが、ブランド化に係る戦略的取り組みを希薄に推移してきた。また、付加価値をつけ生産者等の所得向上に繋がる加工品についても、市内業者が少ないこともあり、販売・加工は市外業者が行っており、結果的に付加価値が流失している現状にあった。よって特産品開発として、以下の3事業に取り組んでいる。

(1) 特産品開発促進事業 平成25年～継続

三沢市の農林畜産業等を活用した付加価値の高い商品開発やPR・販売促進等に係る取り組み。対象事業は、①商品開発・改良 ②マーケティング、販売促進等に関する調査研究 ③外部専門家の招聘 ④包装等の開発 ⑤販売・PRイベント開催又は出展 ⑥販路拡大・宣伝広告及び市長が認めるもの となっている。

また、対象経費は、①謝礼 ②旅費 ③印刷製本費 ④委託料 ⑤通信運搬費 ⑥広告宣伝費 ⑦手数料 ⑧使用料及び借上料 ⑨原材料費 ⑩備品購入費及び市長が認める経費 となっている。補助率は、①～⑩の経費合計の3分の2割以内の額で、1事業当たりの上限は100万円となっている。

なお、応募対象者は以下の5項目を満たしている事業者または団体で、①市内に住所又は本拠地、本店、支店を有すること。②本事業を完遂することが見込まれること。③市将来にわたり継続的な活動が見込まれること。④団体にあつては規約等を有し、かつ団体の意思決定し、執行する組織が明らかなこと。⑤市税を滞納していないこと。が示されており、選定については、特産品開発促進補助金審査会が決定している。

成果としては、平成25年度が、4件でトータル産出額は394.8万円。平成26年度が、6件、418万円。平成27年度が、6件、338.6万円。平成28年度が、4件、283.4万円となっている。具体的な商品としては、パイカ肉の加工、ブランドポークの加工肉、ゴボウの加工品、スルメイカの加工品、長芋の加工品等である。

(2) しごとづくり支援事業 平成27・28年度

農林畜産業の活性化及び雇用の創出・拡大を図ることを目的に、市内で生産されと農林畜産物等を活用して積極的かつ継続的に取り組む付加価値の高い特産品開発や販路拡大、創業などを支援するため、事業に要する経費の一部を補助している。対象事業は、特産品開発促進事業の①～⑥に加え、⑦機械装置又は工具器具の購入に要する経費 ⑧加工施設の新設、改良又は修繕に要する経費となっている。

対象経費は、上記の①～⑩に加え、人件費、消耗品費、修繕費、工事請負費が含まれている。なお対象経費は、8割以内で、1事業当たり500万円を上限としている。

成果としては、平成27年度が、4件、トータル産出額が3756.8万円。平成28年度が、4件、1554.4万円となっている。具体的な商品としては、パイカ肉の加工品、ブランドポークの加工品、ゴボウの加工品、スルメイカの加工品等である。

(3) 三沢市農産物加工施設 平成25年1月供用

地域の農産物を給食や加工品に活用し、食に対する意識の醸成、地産地消の取り組み及び特産品の創出に繋げることにより、農業振興と地域活性化を図るため、農産物加工施設を設置している。

学校給食のセンター方式の施設の一部（全体の６％）を農産物加工施設として平成１９年度に基本設計を策定し、敷地面積１７３８坪、建築面積６２８坪、総事業費１５億２０００万円である。地産加工研究室には、米粉製粉機、スチームコンベクション、大型攪拌機、真空凍結乾燥機、真空梱包器、大型オーブン等の機器をそろえ、様々な調理や加工が可能となっている。

利用可能時間は、９時から２１時で、休館日は土・日・祝日と年末年始となっている。使用料は、午前８６０円、午後１１３０円、夜間８６０円、全日２７８０円である。年間、１４０～１５０件、人数は７００人前後で推移していたが、企業での設備整備が進んでおり昨年度は６割程度の利用となっている。

Ⅲ．所見

農産物については、春から夏にかけて偏東風（ヤマセ）が吹き、冷氣と濃霧による凶作が発生しやすい環境から、ゴボウ・にんじん・ながいも等、比較的冷害の影響の少ない根菜類の作付けが中心となっている。また、水産物もスルメイカ、北寄貝、ヒラメ等は全国的な評価も高い。一方で、これらの農水産物を加工し付加価値をつけて販売する事業者が少ない点については、京丹後市と状況は同じであった。しかしながら、近年の取り組み強化において、生産量日本一のゴボウについては、ゴボウ茶の販売額が年間１億円を超えている。また、直近では長芋のすりおろしを冷凍パックにより、鮮度を保った状態での出荷が急激に増えており取り組みの成果が出始めている状況である。

京丹後市内の道の駅等における観光用土産の加工品についても豊岡市及び宮津市等で加工されたものが多く見受けられる状況である。議会等においても一般質問等でも取り上げられ、商工観光部も一定取り組みを強化しているが、十分とは言える状況になっていない。

平成２８年３月には、自然、歴史、気候風土育まれた「豊かな食文化」を活用し、農林水産業や観光業をはじめとしたまちづくりを発展させるため、議会として「食の王国」のまちづくり宣言を決議し、平成２８年度からは、新市長のもと美食観光の推進が政策の目玉として、活かされてきたところであるが今後の施策に期待もしたい。その意味において三沢市の取り組み事例は、本市としても大いに参考にすべきであり、新製品の開発だけでなく、補助金を受けて開発した製品をリニューアルする際にも使え、商品として新たな付加価値により、ヒット商品に繋がるのではと考える。

また、三沢の食品加工研究施設のように多様な加工機械等があることにより新製品の研究や開発が進む可能性。逆に研究開発に施設等の初期投資が十分できず、魅力ある製品開発に繋がっていないのであれば行政の支援も必要であり、議会として、農産品の加工業者の意見を聞くことも必要と思う。

【久慈市】8月3日(木) (9:30~11:30)

I. 視察目的

「中心市街地活性化の取り組みについて」

II. 視察概要

◎久慈市の概要

平成18年3月に、旧久慈市と旧山形村が合併市新たな久慈市が誕生している。人口(H27国勢調査)は、3万5642人で、年少人口比率12.6%、生産年齢人口比率57.6%、高齢人口比率29.5%となっている。面積については、623.5km²と京丹後市と比べると2割強広く、山林が64.8%を占めている。また、産業における市内総生産は、約1374億円で、第1次産業が3.6%、第2次産業が33.0%、第3次産業が63.4%となっている。

久慈市の魅力と地域資源については、NHKの朝の連続テレビで、2013年に放映された「あまちゃん」の舞台設定としてとして有名であり、北限の海女や久慈琥珀、東北以北では唯一開催の闘牛大会や地下水族館で有名な「もぐらんぴあ」も集客力が高く、日本一の規模を誇る平庭高原も魅力的とのことである。また、歴史が640年以上も続く「久慈秋祭り」は歴史や歌舞伎の名場面を題材にした絢爛豪華な山車や威勢の良い掛け声で県内外からの人出で賑わうとのことでした。

◎中心市街地の現状と課題

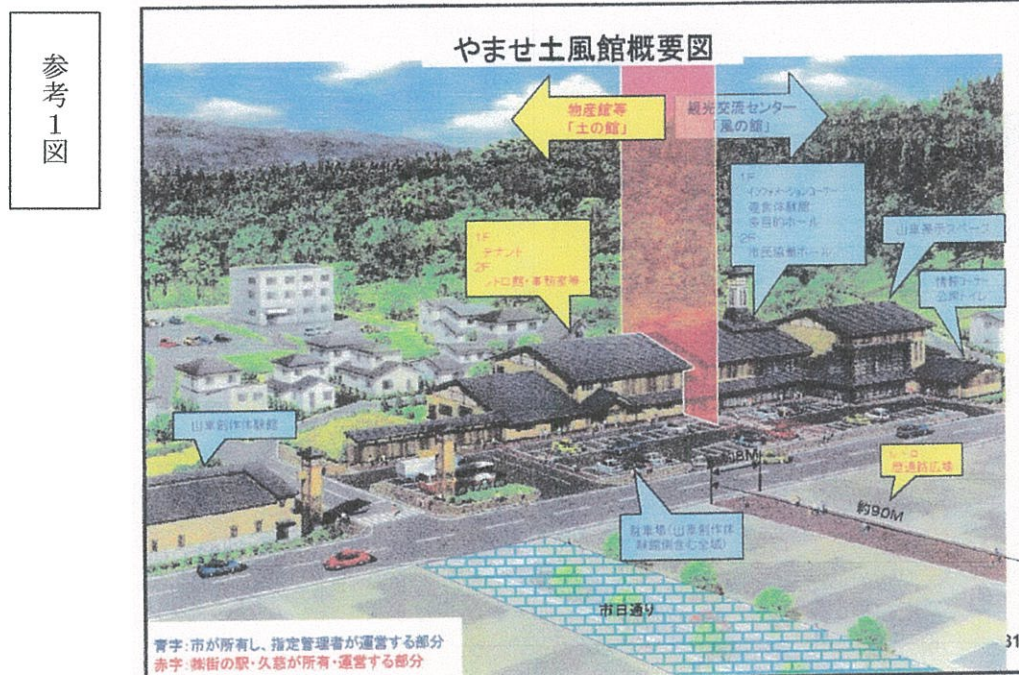
久慈市の中心市街地に国道45号線が通っていたが、昭和62年に国道45号線バイパスが中心市街地外の東側に完成したことにより、地域の衰弱化が始まっている。具体的には、複数の老舗商業施設(H13、H17)や大手スーパー(H14)の撤退。県立久慈病院の郊外への移転。一方、外部資本による郊外型の大型店の集積エリアが国道周辺に誕生している。このことにより、20年間で中心市街地の売り場面積が56.2%減、年間販売額は75.5%減となっている。

また、平成23年3月に発生した、東日本大震災において津波等により311億円の被害が発生しているし、昨年8月30日に来襲した台風10号の被害により2445棟が浸水し、195億円の被害が発生したところで、中心市街地活性化の取り組みを停滞させているところである。

◎旧中心市街地活性化法時代の取り組み

平成10年に旧中心市街地活性化法が制定され、久慈市においても平成12年3月に中心市街地活性化基本計画を策定。商工会議所においても同年5月に基本構想を策定し、市の認定を受けている。この間事業としては、電線類の地中化、ご近所介護ステーション開

設、商店街のファサード（外観の統一感）事業、シャッター絵画及び「きた三陸くじ冬の市」等を実施してきている。しかしながら、中心市街地の歩行者・自転車通行量は及び商品販売額の推移も一定の効果はみられるが厳しい状況である。



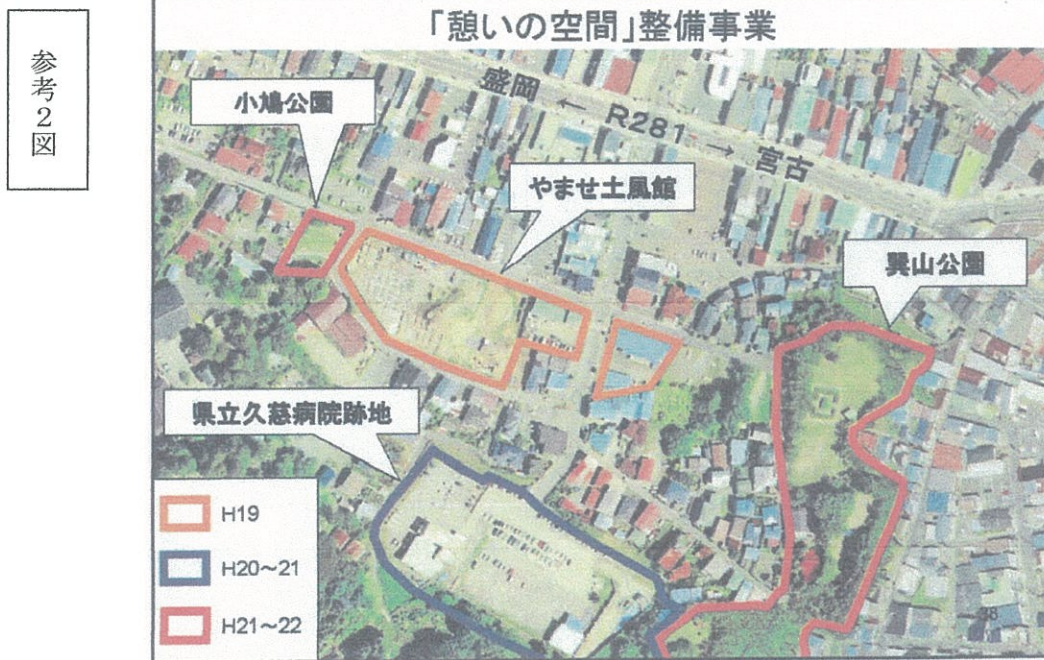
◎新法制定以降の取り組み

平成18年に中心市街地活性化法が改正になり、平成19年5月に全国で3番目に内閣総理大臣の認定を受けた基本計画が、平成25年3月までを第1期としてスタートしている。メイン事業として、大手スーパー跡地に「やませ風土館」(参考1図)を平成20年4月に整備している。この整備運営については、平成17年12月に(株)街の駅・久慈を設立し、個人・地元中小企業から、株主101名、1億8410万円の出資による地域ぐるみの会社を設立したことにより内閣府からも高い評価を受けている。

また、参考２図にあるように、第１期基本計画の搭載ハード事業として、「やませ風土館」の周辺にある県立久慈病院跡地、巽山公園、市民の森を市民の「憩いの空間」事業として、平成２０年から２２年まで一体的に整備を進め、中心市街地の魅力アップに努めている。イベントとしては、県立久慈病院跡地広場や「やませ風土館」活用したものも多く見受けられる。

ソフト事業として取り組んでいる成功店モデル創出・波及事業として、やる気のある経営者を個別に抽出し、選択と集中により重点支援を行い市街地全体の活性化に繋げている。その意味において、成功店の積極的な宣伝広報活動にも業界紙を通して取り組んでいる。テナントミックス事業としては、小売、飲食、サービス業の新規出店事業者対し出店工事費に対し100万円の助成を行っている。また、空き店舗対策チャレンジショップ事業と

して新規出店の未経験者等に対し家賃の一部助成も行っている。



◎第2期中心市街地活性化計画の取り組み

平成26年3月に第2期計画の認定を受けている。期間は平成26年4月から31年3月までで、基本コンセプトは、「山・里・海を丸ごと愉しめる結が支える賑わい・安心の街」となっている。計画の中で大きな事業は、久慈駅前整備事業であり、市街地の西側に位置する「やませ風土館」とその東に位置する駅前整備し、連携をすることにより市街地の人の流れを面的に拡大することに目的を置いた内容となっている。具体的には、駅前交通広場や複合施設として観光・地域交流機能を充実した施設として整備する内容である。事業費は約23億円、財源は社会資本整備交付金（補助率50%）と合併特例債を活用とのことである。

Ⅲ. 所見

直接的な要因は、国道45号線のバイパス化により、市街地からルートを変更とのことだが、車社会の浸透により交通量の増大は、必然的に新たな幹線道路の整備が求められ、国民の生活様式の変化すなわち、生活必需品の大量消費は、自動車による買い物が前提となる。しかし、中心市街地は区画が小さく、自動車を駐車するスペースが不足していることにより、そこに住む住民、特に若い世代が住にくくなる。当然ながら車で買い物に来る人も同じ不便が発生するし、若い世代の経営者が減少すると、購買意欲の高い若い世代に商品構成等に訴求力がなくなること当然と言える。よって、市街地の再開発の必要性に迫られ、旧中心市街地活性化法を根拠にした活性化計画を定めた自治体は全国に約70

0 あったと言われている。

しかしながら、中心市街地の活性化事業や区画整備事業は大変大きな事業費が発生するとともに、お互いの権利が錯綜することにより事業が遅々として進まないのも現実である。一方、久慈市においては、市街地内のまとまった用地の活用、具体的には旧県立病院跡地、大手スーパーや老舗商業施設等の敷地を再開発等一定恵まれた条件も存在している。平成12年の基本計画策定から今日まで多くの取り組みが実施されて一定効果も上げていると考えるが、地理的要件にも恵まれている。岩手県北東部に位置し、周辺には九戸郡の町村があり、地域の商業の中心地となっていて、人口減少率も京丹後市と比べ穏やかな状況といえる。2001年の東日本大震災による津波の影響も、その後に訪れる「あまちゃん」ブームにより活力を維持しているが、昨年の台風10号による浸水で、市街地の定住人口及び歩行者・自転車の通行量は大きく減じている。官民を巻き込んだ取り組みに力があり、民間の活力を生かす手法は、学ぶ点が多いと感じている。

京丹後市は昭和の大合併により、旧6町が誕生しているが織物の町として発展してきた歴史があり、中心市街地と言える規模には至っていない。しかし、織物が不振になったことにより、家内工業の比率も下がってきて、家の近所で食料品及び生活必需品を買い求める必然性が低下しており、旧町にあった商店街は疲弊しているところである。現在は、商品の選択機会が多い大店舗が、峰山から大宮にかけての312号線沿い及び交差する482号線に沿いに集積している状況である。

昨年の6月議会において、長年の課題であった都市計画マスタープランを策定し、魅力的なまちづくりを推進するための行政としてのハード整備をどう進めていくのか、特に都市拠点地域である荒山、新町、河辺周辺の市街化をどう進めていくのか、(仮称)大宮峰山ICのルートもほぼ決定している状況において、交通渋滞の緩和のために幹線道路に接続する道路整備も含め大きな課題である。あわせて、都市拠点地域を中心にした交通結節機能の再構築及び文化機能と子育て支援機能を包含した行政施設の整備が必要であるが、道路や店舗等の密集により、計画的なまちづくりをするうえでも早急な取り組みが必要である。このことが、人口減少社会における京丹後市の魅力アップに繋がるものであり、若い世代に夢と希望のあふれるまちづくりを議会人としてタッグを組んで進めていきたいと考えている。

【八戸市】8月3日(木) (14:30~16:30)

I. 視察目的

「八戸ブックセンターについて」

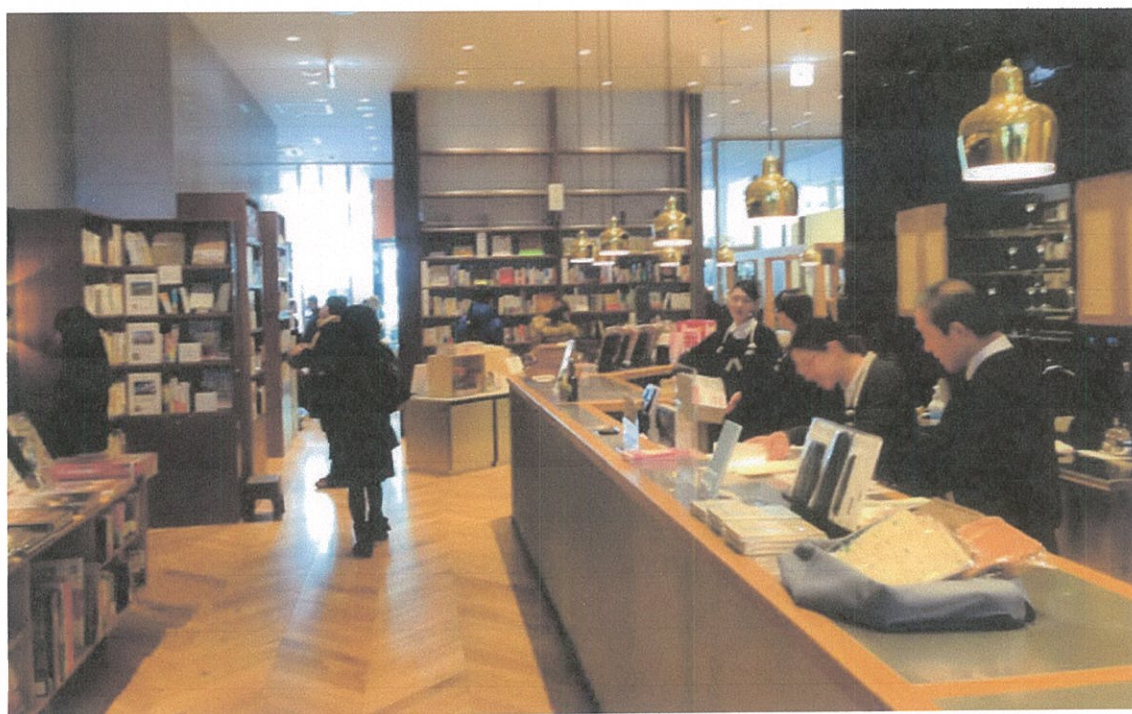
II. 視察概要

◎八戸市の概要

八戸市（は、青森県東南部に位置し、太平洋に面し、夏は偏東風（ヤマセ）の影響を受け冷涼で、冬は晴天が多く乾燥している。また、北東北にありながら降雪量が少なく、日照時間が長いことも特徴である。

八戸都市圏は約 33 万人の人口を擁する。また商圏は隣接する岩手県北東部に及び、商圏人口は東北地方有数の約 60 万人を誇り、人口密度は県内 1 位である。さらに 2002 年（平成 14 年）12 月には東北新幹線が八戸駅まで延伸開業し、東京駅まで最短 2 時間 56 分で結ばれた。また、臨海部には大規模な工業港、漁港、商業港が整備され、全国屈指の水産都市であり、北東北随一の工業都市となっている。

平成 17 年 3 月には、豊かな自然を有し、果樹やその加工品を特産とする南郷村と合併しており、新生、八戸市が誕生している。さらに、平成 21 年には市制施行 80 周年という節目を迎えている。そして、平成 29 年 1 月、全国で 48 番目となる中核市に移行し、地方分権の受け皿となる新たなスタートを切ったところである。



◎八戸ブックセンターの整備の背景

八戸ブックセンターは、政策公約の掲げる「本のまち八戸」を推進する中心拠点として、本に関する新たな公共サービスを提供することで、市民のみなさんに様々な本に親しんでいただき、市民の豊かな想像力や思考力を育み、本のある暮らしが当たり前となる、文化の薫り高いまちを目指すとともに、当施設を中心市街地に開設することにより、来街者の増加、回遊性の向上を図り、中心市街地の活性化にもつなげることを目的として開設が計画された施設である。

「本のまち八戸」の市長公約として、2つの事業を先行して実施している。1つは、ブックスタート事業で、赤ちゃんの生後3か月での股関節脱臼検診の終了後に、ボランティアによる読み聞かせ後、絵本の贈呈と図書館利用案内を渡し、本とふれあうきっかけづくりを提供している。2つ目として、マイブック推進事業として、市内小学校に通う児童に、市内書店で本を購入できる「マイブッククーポン」配布し、自ら本を選び購入する体験を通じて読書に親しむ環境をつくっている。加えて、「読み聞かせキッズブック」事業として、3歳児を対象に本を購入できる「キッズブッククーポン」配布し保護者が絵本等の読み聞かせを行うきっかけをつくっている。

●施設の概要について

八戸ブックセンターは、市内商業施設の中心に位置する民間企業の跡地の六日町側に、建設した複合ビル「ガーデンテラス」との名称で、商業・業務機能を有する4階建て、2階と3階はオフィスを、4階は屋上テラスと飲食テナントを配置している。

フロアを中心となるセレクト・ブックストアは、共通事項として海外文学や人文・社会科学、自然科学、芸術などの分野で専門的にならない内容としている。入門・基本図書棚は、主たる取扱いの分野が、文化的、学術的な広がりを見渡せるようにと、最新の動向に準じた書籍を陳列している。普遍的テーマ棚は、通常親しみのない人でも手に持つきっかけを創出した選書としており、「人生について」、「命の終わり」、「愛するということ」、「仕事のはなし」で構成している。その他、八戸の地域資源に関するテーマ棚、フェアテーマ棚、ひと棚、本のまち棚、新刊平台として、海外文学や人文・社会科学、自然科学、芸術などの最新動向の新刊を陳列している。

また、八戸ブックセンターでは、市内民間書店とのサービス競合を避けるため、窓口における特定の本を購入するための注文（いわゆる「客注」）は原則として受け付けていない。なお、選書にあたっては、公共性を担保するため、八戸市図書館資料収集要綱に準じて、選書基準要綱を制定している。

なお、建物北側に1,100㎡の敷地には、屋根と壁がガラス張りで、2回デッキを擁した全天候型の多目的広場「三日町にぎわい拠点」が整備される予定となっている。水・緑・光などの自然を感じられ街なかの「庭」の役割を担う「マチニワ」をコンセプトとし、日常的に人が集う場所として、八戸ブックセンターで購入した本を広場で読んだり、広場を活用して本にまつわるイベントを行うことも想定されている。

●施設運営の基本方針について

八戸に、「本好き」を増やし、八戸を「本のまち」にするための、あたらしい「本の暮らしの拠点」というコンセプトに基づき、3つの基本方針を定め、それに則った施策を実行している。

（1）方針1 本を「読む人」を増やす

「本好き」はまず、本を「読む人」です。本を読むことは、日々の生活を楽しくする。しかし、そのことが習慣になるまでには、すこし時間がかかる。よって、八戸ブックセンターは、本を読む人を増やすため、これまで出合いの機会が少なかった本が身近にある環境を作り、本を手に取りたくなる工夫を凝らした陳列や空間を設計やイベントの開催など行なっている。

(2) 方針2 本を「書く人」を増やす

八戸市は、三浦哲郎という偉大な作家の生地でもあり、「本好き」が高じて「書く人」を増やすための、執筆するためのブースを備え、相談窓口やワークショップの開設している。

(3) 方針3 本で「まち」を盛り上げる

本は一人で読むものであると同時に、得た知識や情報を、感情、思考などを共有することで、本を介したコミュニケーションを生み出す様々な施策展開している。

このように、基本方針は、子どもから大人までが本と出合い、親しむ環境づくりに取り組んでいく中で、市が直営による運営をしているが、民間書店や図書館と適切な機能分担を図りながら、本に対する新たな公共サービスを提供することとしている。

Ⅲ. 所見

市長の選挙公約の中のひとつが「本のまち八戸」とのことだが、「八戸ブックセンター」及び関連事業の説明を受けると、「自分で購入した本を読む楽しみ」、「本との偶然の出会いを創出する」陳列等、市長の想いがあふれる事業であり一度お会いして、文化・芸術、教育に対するご意見を伺いたいと感じたところである。

八戸市は、中心市街地活性化基本計画を策定しており、ブックセンター及び現在建設中の全天候型多目的広場を計画中に取り込んでいる。今までにできた施設として、「八戸ポータルミュージアムはっち」は、八戸観光の拠点施設であり、今後建設予定の八戸市美術館と共に、来街者の増加、回遊性の向上を図り、中心市街地の活性化にもつなげることを目的としており、今後の中心市街地の活性化の推移が興味深いところである。

京丹後市は、昨年7月に、合併以来の懸案であった「京丹後市都市計画マスタープラン」を策定したところである。1年を経過したが、具体的な議論が進んでいなく、特に今後、京丹後市の中心市街地として発展が見込まれる荒山、新町を中心とした国道312号及び428号接続付近をどのように整備していくのか議会としても議論が必要などところである。マスタープランには、都市拠点地域を中心とした新たな交通結節機能検討及び文化機能と子育て支援機能を包含した行政施設の整備が明記されており、八戸市の中心市街地の再開発は、京丹後市の新都市拠点地域としてハード整備をするうえで規模の違いはあるものの勇気をいただく内容であった。

「八戸ブックセンター」は、セレクト・ブックストアに囲まれた読書席やハンモック席など、さまざまな読書席があり、気に入りの場所でドリンクを片手にゆっくりと読書を楽し

しめる。本に関するイベントや本の面白さを伝えるギャラリーなど企画を凝らした展示がされ、民間書店で取り扱いの少ない本を陳列し、一度手に取って読むことで知的好奇心を刺激するような本が陳列されていて、図書館でもない不思議な空間があるブックセンターであり、同様のものは難しいと思うが、「本のまち京丹後」をコンセプトにした図書館建設は可能と考える。

本市は、各旧町で図書館が設置され、現在は 2 館 4 室の図書館し図書館には司書を配置し、本の陳列やこどもの読み聞かせなど様々な取り組みがされている。価値創造を豊かにした図書館を中心に、全天候型の複合施設を視野に入れた検討をする必要性を感じたところである。

【十和田市】8月4日（金）（9：30～11：30）

I. 視察目的

「図書館建設経過と運営について」

II. 視察概要

◎十和田市の概要

青森県の南東の内陸部にある、人口約 6 万 3 千人の自治体である。平成 17 年 1 月に旧十和田市と旧十和田湖町との新設合併により誕生している。市西部には、十和田湖、奥入瀬溪流、八甲田山系など、十和田八万平国立公園に指定されている。市東部には奥入瀬川や稲生川などが潤す田園地帯や、基盤の目状に広がる中心市街地があります。

この地域のまちづくりは、幕末の安政年間に、三本木原の開拓に着手したことに始まり昭和に入ると国営開墾事業として継承され、県内屈指の穀倉地帯として発展を遂げました。戦後、軍馬補充部が解体されるとその跡地を基盤とした新たな都市計画が進められている。近年は、新しいまちづくりの一環として、官庁街通りという屋外空間をひとつの美術館に見立てた「Arts Towada」計画を実施し、十和田現代美術館やアート広場を整備している。

◎市民図書館建設とまちづくり

市街地に位置する官庁街通りは、1969年都市計画街路として作られ、シンボルロード事業として平成元年から整備を行っている。幅員 36m のうち車道 11m、その両側が歩道で 12.5m、延長 1.2km、道路に樹齢 80 年を超す桜が 156 本、ゆったりとみごとな風景である。その一角に教育プラザが、図書館と教育研修センターの機能を併設した施設で、今までの 2 倍の広さとなっている。通り全体を見立ててアート作品を配置している。その中核施設が、西沢立衛氏設計の現代美術館であり、人口の 2 倍近い年間来場者が 2009 年のオープン以来集っている。屋外オブジェには、草間彌生氏の作品もある。また、近くの商店街には市街地活性化施設として、隈研吾氏設計の市民交流プラザもある。

今回、教育子プラザには安藤忠雄氏が公募型プロポーザルの結果、設計している。アートな十和田を標榜している市長の思いが詰まったまちづくりになっている。

◎市民図書館運営について

施設概要は、鉄筋コンクリート造り1階建。建築面積は、 3407.85m^2 （図書館 2574m^2 ）。延面積は、 3199.04m^2 。敷地面積は、 9519.46m^2 。建設費は、約14億5千万円。開館は、平成27年1月15日。開館時間は午前9時から午後8時まで。休館日は、毎月第4木曜日、1月1日から1月4日及び12月29日から12月31日、蔵書点検期間として年間5日以内となっている。



1) 基本方針

従来の図書貸し出しサービスを維持するとともに、市民が必要とする資料・情報の提供を通じて、市民生活を支援し地域を支える情報拠点として積極的な図書館活動を展開しま

す。となっている。

2) 運営方針

ア. 図書館サービスの充実

- ・図書館資料の収集（取扱要領）
- ・ＩＣシステムによる利用者の利便性の向上
- ・学校を利用した遠隔地貸出返却サービス

合併後に十和田湖町の図書館を閉鎖し、十和田湖公民館として蔵書、約7,000冊、利用者200人、利用冊数500冊として、活用されているが、残り2館の南公民館、東公民館と同程度の図書館機能となっている。大きな要因は、公立学校等を活用した上記システムが大きく貢献しており、図書貸し出しに対する遠隔地の要望に込えている。

- ・身体障害者への宅配貸出の実施
- ・図書館ホームページの活用
- ・レファレンスサービスの充実と利用促進
- ・雑誌スポンサー制度の充実

政治。宗教的な新聞の寄贈が9部、雑誌については、寄贈及び出版元からの提供が23部と出版物として社会通念上広く認められているものを積極的に受け入れ、閲覧できるようにしている。

- ・図書館ボランティアの育成

イ. 子どもと諸活動の支援

- ・「家庭読書の日」の普及啓発
- ・学校図書館協議会への支援（読書感想コンクール補助）
- ・子どもビオバトルの実施

児童、一般の部に分かれて、発表者が紹介（3分～5分）した本について、参加者全員で「どの本が一番読みたくなったか？」を投票し。最多票を集めた本を「チャンプ本」として決定している。

- ・子ども司書養成講座の実施

図書館業務の体験を通じて、司書の知識や技術等を学び、読書の素晴らしさを広め、ひとと本との橋渡しを手助けする読書活動推進の担い手として司書を養成している。

- ・学校、保育所等へのセット貸出、団体貸出
- ・読書活動推進事業の充実
- ・ヤングアダルトサービスの普及
- ・図書館を使った調べる学習コンクールの実施

ウ. 市民学習活動・課題解決の支援

- ・読書会の実施
- ・地域課題に対応した企画展示

- ・十和田市観光版フレットの展示
- ・本のリサイクルフェア実施

平成28年度は11月に2日間実施し、市民378人、近隣町村住民29人が参加し、家庭で読み終わって不要になった本を収集し、再利用してもらい、読書活動推進に役立てている。

- ・社会福祉施設等へのセット貸出

以上具体的な運営方針を列挙した。これ以外にも、他の図書館やその他関係機関との連携・協力。図書館サービスの点検・評価等についても運営方針を定めている。



Ⅲ. 所見

十和田市の官庁街通りは、松や桜の樹木が歩道にゆったりと存在しており、車まっすぐも延びる道路と老木、そして多様なオブジェが初めて訪れる人を豊かな気持ちにさせるまちであることに感動した。また、約50年をかけて官庁通りを育ててきた行政と市民の心意気きに京丹後市もまちづくりのハード部分を整備するに当たり各あるべきと思うところである。このことは、平成22年11月に富山県南砺市を産業建設常任委員会で視察したときも同じ思いを抱いたところである。

京丹後市は、合併して14年目を迎えているが、昨年の7月にやっと都市計画マスタープランを策定したところである。市内には旧町時代にそれぞれに、行政施設や商店街が歴史の中で形成されてきており京丹後市の中心市街地が形成されている状況にはない。少子

高齢化の進行は、日々の暮らしの中でも実感されている。特に、小中学校の再配置及び地域の自治組織の持続可能性については、黄信号も点滅する地域もあり、小規模多機能自治の検討が議論されているところである。

現在、山陰近畿自動車道路の（仮称）大宮峰山ＩＣ事業化及びアクセス道路も固まりつつある中で、若い世代の人々に、京丹後市を選んでいただく、住み続けていただくためにも中心市街地の新たな形成、それに伴う行政のサービス機能のその地域での展開も、魅力あるまちづくりには必要不可欠と考えている。都市計画マスタープランにあるように、都市拠点地域を中心にした交通結節機能の再構築及び文化機能と子育て支援機能を包含した行政施設の整備が必要である。特に、合併の財政メリットの一つである合併特例債の発行限度時期が、平成３１年度までであり、事業繰り越しをしても３２年度であり、財政基盤が弱い本市にとっては、この期間にどこまで特例債を活用できるかは、自立したまちとして生きていく上では大変重要と考える。

その一つが複合施設を含む図書館構想だと考える。そのため、人口規模や面積要件、財政要件を勘案し、類似団体である十和田市の市民図書館を視察したところである。今後、議会人として積極的に執行部に意見していきたいと考えている。